

第 88 回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

障害のある人たちの高等部卒業後の生活は働く生活が中心になります。一般就労する人もいれば、福祉就労する人もいますが、いずれにしても、学校を卒業した後は、働く生活が中心になります。

しかし、特別支援学校を卒業したらすぐに働けるようになるかということのようなことはありません。特別支援学校の小学部から中学部、高等部と進んでいく学校教育のなかで、働く力を育てていかなければならないのです。どのような力を育てていけばよいのか。今回はそのことについて考えてみたいと思います。私が関わった人たちも、学校を卒業して社会人として生活しています。周囲の人の支援を引き出しながら、生活しているのです。そこで求められていることは何なのかということです。

ほめられたり、感謝されたりすることは、子どもが成長していくうえでとても重要なことだと思います。それは、障害の有無には関係ありません。どんな子どもでも同じです。「〇〇さんがいてくれて助かった」、「〇〇さんに手伝ってもらってよかった」と言われる経験の繰り返しは、満足感や達成感を味わうことにつながり、そこから役割意識や自尊心、自己肯定感、自己効力感が養われていくからです。役割意識や自尊心、自己肯定感、自己効力感を育てておくことは、その後の働く生活を支えるうえで最も重要な要素です。だれでも、役割意識を持つことや自尊心を持つこと、自己肯定感や自己効力感を持つことで、働き甲斐を感じたり、達成感や満足感を味わったりすることができるからです。役割意識や自尊心、自己肯定感や自己効力感は、成長すれば自然に身に付くものかということのようなものではありません。学校や家庭における様々な経験を通して、育てていくものなのです。

役割意識を効果的に育てるためには、学校と家庭との連携が重要です。子どもが担う役割はどのようなものでもかまわないのですが、学校と家庭と共通理解して役割を果たす活動を考えることができれば、学校でしていることが家庭でも生かされたり、その逆も可能になったりしやすくなります。これによって、学校でも家庭でもほめられたり感謝されたりする経験を増やすことが可能になるのです。

学校では、役割を果たしてもらうために係活動を考えてアイデアが浮かんできます。健康カードを保健室に持っていくような活動でもかまいませんし、プリントを配布する活動も係活動になるでしょう。大切なことは、係活動が決まったらそれを一人ですることができるように工夫することです。そして、もう一つ忘れてはならないことは、役割を果たした後で、「ありがとう」、「〇〇さんがいてくれてよかった」と声をかけることです。一人でできるようになった活動を実行後に感謝されたり、ほめられたりすることは、自分が必要とされているということに気づくことにつながるからです。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラスルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (エンパワメント研究所) など